

フォーラム委員会だより

第201回 aaca フォーラム開催報告

子供たちにつなげる「アートと社会の共存」への想い

講師：絹谷香菜子氏

2023年3月9日(木)18時～19時30分(サンゲツ品川ショールームにて) 日本建築美術工芸協会法人会員 萩尾昌則

絹谷香菜子さんは講演会当日、「中学二年生の時に興味を持った」と語るラピスラズリを思わせる青の装いで登壇されました。コロナ禍が第8波も落ち着きつつあり、もう少しでマスク着用は自己判断となる本年3月9日(木)に、株式会社サンゲツ様のご厚意で品川ショールームのホールをお借りしながら、第201回フォーラム『子供たちにつなげる「アートと社会の共存』への想い』は開催されました。

絹谷香菜子さんは、ご紹介するまでもなく、現代洋画壇の巨匠・絹谷幸二氏を父に持ち、ご自身も現代日本画家としてご活躍されています。そんな絹谷さんご自身が語られる「想い」に期待を集め、50名程度の聴衆が集まりました。1時間30分にわたり、実に雄弁に多様なことをお話しいただきましたが、ここではその一部をご紹介させていただきます。

絹谷香菜子さんは『生命を見つめる』

細密な画風の動物画でも知られる絹谷さんは会場に2点の絵画「プードル」「フラミンゴ」を展示されました。

これから画家自身の口から語られる物語を拝聴する前に、実物というリアルな実態が雄弁に「絹谷香菜子」さんを語ります。

その緻密な筆遣いは、まるで顕微鏡で細胞まで見通したような繊細さが感じられ、また漆黒のように見える背景も幾重にも層を重ねた重力場のドレープのようで観る者を魅了し吸い込みます。

絹谷香菜子さんはきっと科学者の目を持っているのでしょう。彼女の眼に捉えられる世界が素粒子にまで分解され、絹谷香菜子という画家の中で再構築される。その絵に漂う写実とは異なる不思議な細密さが感じられるのは、絹谷香菜子さんの画家としての眼差しで生命の揺らぎを捉えているから。

絹谷香菜子さんは自作の紹介でも「動物たちの毛一本一本、瞳孔奥深くまで想いを込めて描き、その動物に自己を投影し、



「一体となれる感覚まで持っていきたいと思いながら筆を動かし続けています。動物を見つめる事で自己を見つめ、そしてまた反芻して動物達が見るこの世界の事に思いを馳せていただきたいと願っています。」と語ります。

絹谷香菜子さんは『日本の伝統を伝える』

幼少の頃より「水が大好き」だったと語る絹谷さん。水の気持ちを知りたくて子どもの頃に金魚を口に含んだエピソードには驚かされますが、学生の頃の海底などの海の絵を映写しながら「石の美しさや水の気持ちよさを着彩していくには上手く表現できない」と思い、「色の無い世界で色を見つける」べく墨を中心とした画材に傾注するようになったとのこと。父・絹谷幸二氏は、その名作の「富士山」を描く紅は砂鉄で出来ていることを香菜子さんに教え、「すべては循環している」と伝えたそうです。そのことに感銘を受けたという香菜子さんは、講演の中でも持参していただいた様々な日本画の道具をテーブルに広げ、自然由来の素材の成り立ちを説明されましたが、そこには「循環する自然を愛おしむ」眼差しが強く感じられました。

絹谷香菜子さんは『自分と世界をつなげる』

ロンドン留学時にロッド・ジャドキンス（日本では『クリエイティブ』の処方箋で知られる）に師事した絹谷さんは、「あなたのアイディアは、いつどこで生まれたの？」と突き詰めるように導かれ、コンセプトの大切さに気付かれたとのこと。イギリス北東部の都市ゲーツヘッドにあるエンジェル・オブ・ザ・ノース（アントニー・ゴームリー作）を例示しながら、「単に美しいものをつくるのではなく、社会と結びつき、自分と作品と社会がつながる」創作をしなければならない、と考えるようになったそうです。

また、ロンドン留学中に、美術館の中の子どもたちのワーク



ショップに遭遇し、美術の中で美術の授業をするのではなく、絵がある空間で自分たちの国の政治の話をしている光景に接し、「アートの影響とは、直接的な影響だけでなく、のちの人生にじわじわと間接的に新しいアイディアや心境の変化を誘発するもの」と気付かれたそうです。

絹谷香菜子さんは『愛の伝承者』

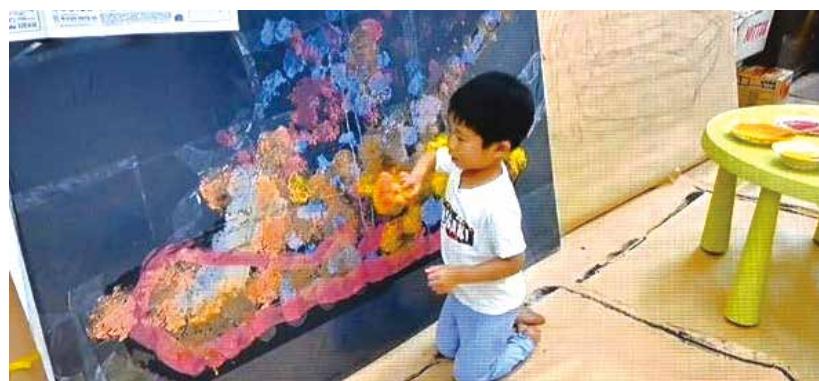
絹谷香菜子さんの講演の節々に父・絹谷幸二さんやご家族からの影響が感じられます。

「洋画家である父は作画中の絵を立てて制作しましたが、日本画は床に拡げて上から俯瞰しながら制作します」と語る彼女の背後には父親の温かい眼差しが感じられ、子供の頃の思い出と共に語るのは愛されて育った記憶です。大学で美術教育を学び、ロンドンでコンセプトの大切さに気付いた絹谷さんは、一時は子どもたちに美術教育を行っていたそうですが、「教えた生徒にしか影響が及ばない。もっと広く社会と関係したい」と感じるようになり、画家として生きる道に歩みを進めたそうです。

経歴として語られるそれらの物語からは、絹谷家の愛情を受け継いだ香菜子さんが、その愛を世界に伝承していく、そんなアナザーストーリーが見えてきます。

そして、未だ先行きの見通せぬウクライナ紛争。この紛争への無力感、ウクライナの友人への思いなどから、香菜子さんのお子さんと共に作した『戦争を止めよう Stop the Tank 2022』は愛の伝承の最たる結晶と言えるのではないでしょうか。

この画は当時4歳になる息子さんと「大砲から砲弾を出すのではなく花を振りまいてお花畠にして、戦車を方舟にして人々を幸せにしよう。」と言いかながら描いたそうです。熊はアイヌでは人間の祖先とのことで、「人智の及ばない神聖な生きもの」として「戦車を止めるための神獣として選んだ」とのこと。こ



『戦争を止めよう Stop the Tank 2022』制作風景

の発想力、愛の伝承、作品のつくり方、それらすべてが人類の未来の可能性への期待感・希望を感じさせてくれます。

絹谷香菜子さんの『これから』

現在多用される「日本絵画」という言葉は、フェノロサがつくった明治の言葉であり、「西洋絵画との区別」のために発明された言葉なのだと思います。絹谷香菜子さんは「日本絵画の精神は、その言葉が誕生する以前にある」と語ります。

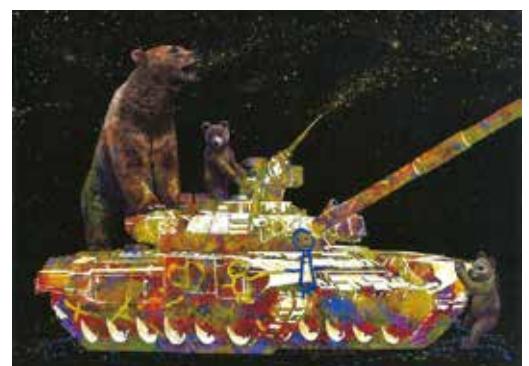
象形文字の簡略化の経緯やひらがなの成り立ちに触れ、日本の心象風景に眼を向けて。柱と襖の日本の伝統建築の構成にも触れ、「何よりも柱や襖の向こうにある本物の自然が美しい。絵画は写実よりも簡略化やコンセプトが大切」と説きます。

絹谷香菜子さんはこれからも「考え続け」そして「世界とつながり続ける」のでしょう。

講演中に何回か「何を言いたかったのかな…スミマセン、結論が見えなくなりました」と息継ぎする実直なお人柄と共に、会場で配布された作品集のタイトル「A Part of Me」がそのことを物語っています。

「世界の人々、生きもの、地球は私の一部であり、私の一部は彼らの一部であることに思いを馳せました」との言が作品集でも紹介されています。素粒子の世界では世界は溶け合っていると解釈されるそうです。私たちの身体でさえ一定ではなく、細胞は分解され体外に溶け出しているのです。正に世界は「A Part of Me」。

「世界の観察者」である絹谷香菜子さんは、これからも「世界とつながり続ける」ことでしょう。絹谷香菜子さんの益々のご活躍を祈念差し上げながら、講演会のご報告の筆を置かせていただきます。



『戦争を止めよう Stop the Tank 2022』